

# 3 サポートグループ・アプローチとは

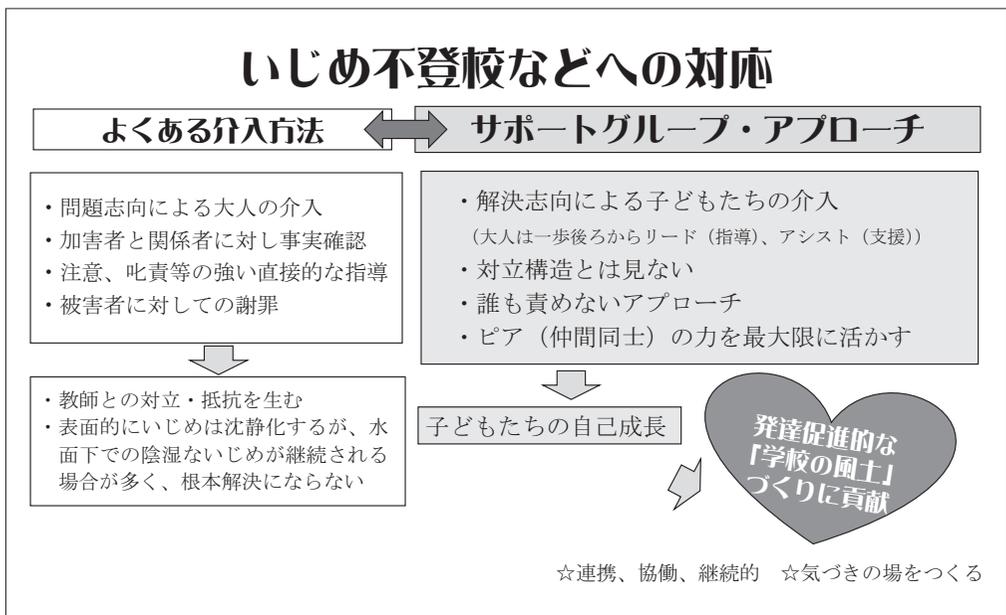
## サポートグループ・アプローチの基本的な手法

いじめや不登校などが起こったとき、どのような指導がされるでしょうか。加害者やその関係者に事実確認し、問題や原因を追求し、注意・叱責などの強い指導をして、被害者に対して謝罪させて終わる——このような指導が多いのではないのでしょうか。

サポートグループ・アプローチでは、まったく異なった対応となります。いじめや不登校などの「問題」や「原因」についてはふれません。何が起きたのか、いつ、誰が、どこで何をしたのかなどについての詳細は、一切聞かずに対応していきます。

それでは何に焦点を当てるかということ、子どもたちに内在する「解決」や「未来」（どうなりたいか、どうなっていればよいかなど）です。そして、子どもたちが潜在的に持っているリソースを引き出し、使えるように広げていくことで、解決の実現・構築をめざす「解決志向アプローチ」の考え方を原点に、そのスキルを使っていきます。

また、支援を必要としている子どもが再び笑顔で学級の仲間たちと楽しく



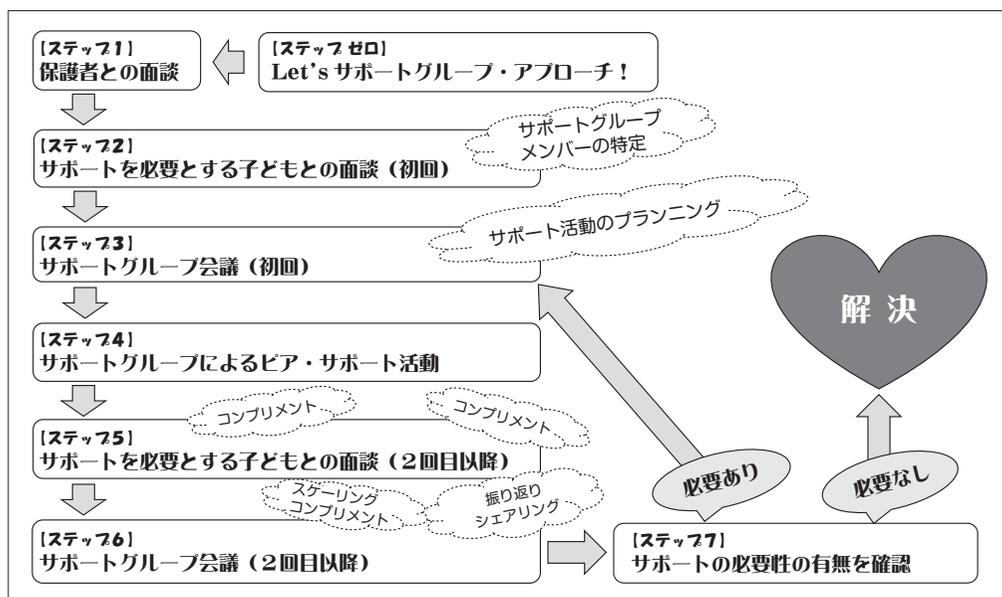
幸せに過ごせることを願い、教師やその関係者たちの指導、援助のもとに、子どもたちのピア（仲間同士）の力を活かしていきます。仲間を互いに思いやり、支え合いながら子どもたち自身の力で課題を解決していく「ピア・サポート」で、支援を必要としている子どもをサポートしていくのです。

すでに同じような方法で取り組んでいる方もいらっしゃるでしょう。そのような方にとっては、このサポートグループ・アプローチは、そのコツやステップの進め方を少し整理するだけで、学校現場に容易に取り入れられるでしょう。そして、今まで以上の成果や手応えをきっと感じられると思います。

## サポートグループ・アプローチの7+1のステップ

下図をご覧ください。詳しくは第2章で解説しますが、サポートグループ・アプローチは基本的に以下の7+1のステップで実践していきます。

7+1もステップがあると大変……と感じるかもしれませんが、一つひとつのステップの内容には、なじみのある方も多いと思います。繰り返しになりますが、解決志向アプローチをベースに、ピアの力を活かしながら取り組んでいくと、驚くような効果があるのです。



### [ステップ0] Let's サポートグループ・アプローチ!

サポートグループ・アプローチを行っていく中心となる人を、この本では「主体的実践者」と呼んでおきます。主体的実践者は、例えば担任、養護教諭、相談員、スクールカウンセラーなど、誰でもOKです。

サポートグループ・アプローチの実践を進めるための前提条件は、主体的

実践者が解決志向アプローチとピア・サポートの考え方やスキルを学び、習得しておくことです（両方を学んでないからできないとあきらめないでください。まずは本書でしっかり学べば始められます。本書はそのためのものなのですから）。

そして、次のステップに進む前に、サポートを必要とする子どもを取り巻く関係者と連携を図り、サポートグループ・アプローチで取り組むことを共通理解しておきます。

### **【ステップ1】保護者との面談**

いじめや不登校などの問題で連絡や相談を受けたら、サポートを必要とする子どもの保護者と会い、解決志向アプローチで面談を進めます。そして、子ども本人が望むメンバーでサポートグループを結成して、サポートしていくことを伝えます。

### **【ステップ2】サポートを必要とする子どもとの面談（初回）**

サポートを必要とする子どもと解決志向アプローチで面談を進めます。ラポールが形成されたら、サポートグループ・アプローチの説明をし、この方法で支援することの理解を得ます。サポートグループのメンバーは、サポートを必要とする子どもと相談して、一緒に決めていきます。

### **【ステップ3】サポートグループ会議（初回）**

おもに放課後の時間を使って、サポートグループのメンバーに教室や相談室、保健室などに集ってもらい、サポートグループ会議を開きます。サポートを必要とする子どもは同席しません。どんなサポートが1週間でできそうか、個人やグループでのピア・サポートのプランニングをします。ここでの考え方や会議の進行、子どもたちとの会話は、解決志向アプローチを基本としたうえで、ピア・サポート活動のプログラムを参考にします。

### **【ステップ4】サポートグループによるピア・サポート活動**

子どもたちはサポートグループとしてピア・サポート活動を実行します。教師たち大人は、解決志向アプローチの手法でその活動をサポートしていきます。

### **【ステップ5】サポートを必要とする子どもとの面談（2回目以降）**

サポートを必要とする子どもと、1週間の振り返りの面談をします。この1週間に起きた「楽しかったこと」「うれしかったこと」「今より少しはましだったこと」「プチハッピーと思ったこと」などを聴きます。

## **【ステップ6】 サポートグループ会議（2回目以降）**

2回目以降のサポートグループ会議のやり方は、基本的に【ステップ3】の初回と同様です。ただし、1週間前にプランニングしたサポート活動と、この1週間ですぐに実行できたこととは比較しません。子どもたちが行ったサポート活動の努力を聴きながら、それをねぎらい、承認し、コンプリメントします。まだサポートが必要と判断されたら、次の1週間のピア・サポートのプランニングをします。

## **【ステップ7】 サポートの必要性の有無を確認**

【ステップ5】や【ステップ6】で、サポートを必要とする子どもはもちろんのこと、保護者やサポートグループのメンバー、そして主体的実践者や担任など、誰もが「もう大丈夫」と確認できたらグループは解散し、活動は終了です。

## **実践成功の秘訣は**

サポートグループ・アプローチは、サポートを必要としている子ども自身が望む未来のために、本人が望むメンバーでサポートグループを結成し、私たち大人は一步後ろからリード、アシストし、みんなで解決に向かって行動していくものです。

先ほど解決志向アプローチの発想の前提<その3>で紹介したとおり、子どもたちが主体者であり、「解決の専門家である」と考えます。子どもたちに加え、教職員、スクールカウンセラー、保護者など多くの関係者が相互にリソースを活かし合っていくのです。

誰かを悪者に仕立て上げたりすることを避け、お互いの持っている力や肯定的な側面に焦点を当て、柔軟な姿勢で協力し合い、シンプルに、そしてシステムティックに実践を継続していくことが成功の秘訣となります。

## **小学校・中学校・高校、校種を問わず効果が期待できます**

個々の事例がさまざまに異なっても、サポートグループ・アプローチのシンプルなステップをシステムティックに展開していくことが基本であり王道です。つまり、サポートグループ・アプローチは、いじめや不登校などの個々の問題（錠）に対して、マスターキーと同様の働きをするわけです。ですから、小学校、中学校、そして高校でも校種を問わず効果が期待できます。

## **小学校に打って付け**

そもそもサポートグループ・アプローチは、スー・ヤングが小学校での実